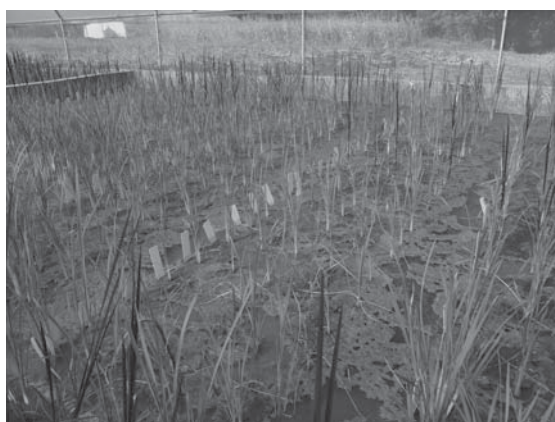


「理研一名大科学技術ハブ」に参画し、ケニアで連携研究を開始

農国センターは、2018年度より始動した「理研一名大科学技術ハブ(仮称)」に参画しており、この一環として取り組む「イネ高生産性制御機構の解明と国際展開」に関する連携研究を開始しました。「科学技術ハブ」は、理化学研究所が、大学、研究機関や産業界と協働し、科学技術におけるハブの役割を担い、研究開発のネットワークを形成及び強化することにより、わが国の科学力の充実を図るとともにイノベーションの創出を推進するために行っている事業です。「理研一名大科学技術ハブ(仮称)」においては、遺伝子・代謝解析技術の世界的拠点である理化学研究所とイネ科作物研究の世界的拠点である名古屋大学が連携し、食料生産やバイオマス生産にとって重要なイネ科作物研究の重要ハブ拠点を形成するとともに、国際社会に貢献することを目指しています。本事業において、農国センターは、大学院生命農学研究科及び及び生物機能開発利用研究センターとの連携の下、これまでの活動を通じて構築したケニア農畜産業研究機構ムエア支所の研究拠点を活用し、名大-理研の共同研究によって開発された有用遺伝子を持つイネ系統を用いて栽培試験を行い、アフリカ向けの改良イネ品種の作出および高機能品種の能力を十分に発現させる栽培技術の開発に取り組んでいます。また、名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所(ITbM)、理化学研究所および農国センターの連携研究として、穀物生産に甚大な被害を及ぼしている寄生雑草(ストライガ)を根絶する自殺発芽剤のケニアにおける実証研究も推進しています。(槇原大悟)



ケニアにおけるイネの耐塩性評価の様子



ストライガ(紫色の花をつけた植物)に寄生されて枯れ上がったトウモロコシ

ケニアから共同研究者が来訪

農国センターは、2018年度より3年間の予定でJSPS研究拠点形成事業(アジア・アフリカ学術基盤形成型)「アフリカ稲作研究イノベーションのための研究拠点と国際協働ネットワークの構築」を実施しています。2018年9月18日~28日にケニア農畜産業研究機構ムエア支所のエミリー・ギチュヒ研究員を招へいし、交流活動を行いました。ギチュヒ研究員は、本プロジェクトの一環として取り組んでいる「衛星リモートセンシング技術を用いた肥培管理法の確立」に関する研究技術の習得と打合わせのため、槇原准教授と共に共同研究機関である東京農工大学を訪問しました。また、農国センター及び大学院生命農学研究科附属農場においては、同じく本プロジェクトの一環として取り組んでいる「遺伝的形質×栽培環境×栽培管理の相互作用解析を通じた品種改良および栽培技術開発」に係る打合わせを行うと共に遺伝解析も行いました。さらに、岡山大学資源植物科学研究所で講演を行った後、日本育種学会においては共同研究の成果に関するポスター発表を行いました。(槇原大悟)



来日したエミリー・ギチュヒ研究員